

筑波大学日本文学会会報

第40号

2016年2月

文学研究と云は、解釈する事と見付けたり……………	1
無為自然……………	4
日本文学会だより……………	6
研究室だより……………	8
卒業生だより……………	12
日本文学会教員学生名簿……………	14

文学研究と云は、解釈する事と見付けたり

新 保 邦 寛

いつ頃からそうなったのか、恣意的な報告に過ぎないという理由で、解釈が近代文学研究の場から排除されてしまった。最近、友人の言葉を借りれば、中高生レベルの読み取りすら覚束無い研究者を見かけることがある。果たして解釈は、それ程好い加減なもののだろうか。私は、長年、近代詩の読み方を指導してきて、多くの解釈上の誤りを正すことが出来たと自負している。そこで、その一例を以て解釈行為の正当性を示してみようと思う。

高村光太郎の『道程』所収作に、「寂寥」(『スバル』明治44年4月)という全七連の文語自由詩がある。

赤き辞典に

葬列の歩調あり

火の気なき煖炉は

鉦山^{かなやま}にひびく杜鵑^{とけん}の声に耳かたむけ

力士小野川の嗟嘆は

よこれたる絨毯の花模様^{ストオリ}にひそめり

何者か来り

窓のすり硝子に、ひたひたと

燐をそそぐ、ひたひたと――

黄昏はこの時赤きインキを過ち流せり
たそがれ

何処にか走らざるべからず

走るべき処なし

何事か為さざるべからず

為すべき事なし

坐するに堪へず

脅迫は大地に満てり

いつしか我は白のフランネルに身を捲き

蒸風呂より出でたる困憊を心にいだいて

志きりに電磁学の原理を夢む

朱肉は塵埃に白けて

今日の仏滅の黒星を喰ひ

晴雨計は大擾乱を起しつつ

月は重量を失ひて海に浮べり

鶴香水は封筒に黙し

何処よりともなく、折檻に泣く

お酌の悲鳴きこゆ

ああ、走る可き道を教へよ

為す可き事を知らしめよ

氷河の底は火の如くに痛し

痛し、痛し

第三連の〈何処にか走らざるべからず……／何事か為さざるべからず……〉が、最終第七連で、やや趣を変えて繰り返されることや、第四連で時が進行し夜になっていることを思えば、大きく二部構成になっていると言えよう。そしてその前半は、比喩表現が目立つとはいえ、解釈上さしたる困難はない。

先ず第一連は、詩的主体が部屋の中を見渡していく。すると、書架に〈赤き辞典〉の並んでいる様が、〈葬列〉の〈歩〉みのように見え、〈火の氣〉のない〈暖炉〉は、人気の絶えた廃〈鉱山〉を思わせ、まるで〈杜鵑の声〉が反響するのにじいっと〈耳かたむけ〉ているかのようで

あった。さらに《花模様》の《絨毯》は、化粧まわしを連想させるものの、《よこれ》が目立つものだから、あの無双の名《力士小野川》の《ひそめ》たる《嘆》きが迫ってくるように思えてならなかった、と。要するに部屋の調度品が、擬人法の使用が示唆する如く、死や虚無や悲嘆の声を放って、詩的主体を苦しめると言う次第だ。そうした強迫観念は、続く第二連で、《黄昏》時の窓外の様子に目を向けた時より露わになる。《何者》かがやって来て、《窓のすり硝子》一面に《ひたひたと》青白い《燐をそそぎ》、自分を追い詰めるという風に。折しも彩雲が、《過》って《赤きインキ》をこぼしたかのように《窓》を染めたため、詩的主体の苦悶が極まり、とうとう第三連では、もうこんな絶え間のない《脅迫》に《堪へ》られないが、でもどうしたら好いか分からないと、いわば絶叫の声をあげることになる。

ここまででは、誰がやっても似たような解釈になると思うが、問題は、後半の、第四、五連である。いつしか日も暮れ、ここで初めて登場する《我》が、柔らかに暖かい《白のフランネル》の寝巻に《身》を包んでいるのに、《蒸風呂より出でたる》疲労感を覚えつつ床に就く、そして《電磁学の原理の夢》みると言うのである。当然、第五連は、その《夢》の内実を示している筈だが、例えば飛高隆夫『高村光太郎『道程』全詩鑑賞』（平成21年明治書院）は、《電磁学の原理》を「吸引、反発の際に奔出するエネルギー」の謂いとし、第五連について、解釈を放棄した上で、「現実から遮断された光太郎の精神の、惑乱、混迷の状態を表現している」と述べている。しかし《電磁学の原理》とは、電気と磁気の相互作用を意味するのではないのか。『広辞苑』によれば、「電波はその周囲に磁場を作り、磁力に力を及ぼし、また磁石の作る磁場内にある電流はその磁場から力を受ける」という現象だ。つまり、《我》は、机上の《朱肉》が埃で《白く》なっているのを見て、そのせいで《今日の仏滅》という大悪日が笑い種になってしまっているのではないかと思ったり、逆に、《晴雨計》が《今》目の前で壊れて大混乱を来しているけど、もしやそれは、《月》が《重量を失》って《海に浮》ぶような異変が起こったせいではないかと思ったりしているのである。近代科学の知見が新たな想像力の源泉になっている詩をよく見かけるが、この詩の場合も、第一連の室内の調度品の威圧感と第二連の外部世界の《脅迫》が、ここに到って《電磁学の原理》宛ら相互作用を起こしているように思われ出し、《我》は精神的にますます追い詰められるに到ったと報告しているのである。

だから、第六、七連では、《我》の心の苦悶の状態が巧みな比喻で説明されていく。《鶴香水》の香りが《封筒》に閉じ込められるように、沈黙《黙》を強いられているものの、自分の苦悶の声は、厳しい《折檻》に責め立てられて《泣く》《お酌の悲鳴》が《何処》からともなく漏れてくるように聞こえてくることだ、と。そしてその自分の状態とは、《氷河の底》に置かれたようなもので、《火》に焼かれるのと変わらない《痛

みに苛まれ耐え難いと叫び、一刻も早く逃れたいので、自分が何をすべきか、どこへ向かうべきか誰か教えてくれと、再度懇願する様を書きとめ、結びとしている。

以上の解釈は恣意的なものではないと思うが、いかがであろうか。こうした営為を棄ててしまえば、『道程』論や高村光太郎論は無論のこと、そもそも近代詩に関するどのような論考も、全く根拠を無くしてしまうのではないかと思う。

私が三十四年間の大学教員生活で言ってきたことは、結局その点に尽きるのかもしれない。

(平成二十八年三月)

無為自然

谷 口 孝 介

新保先生から日本文学領域の代表を引き継いで二年になる。その間つくづく実感したことであるが、先生が細々とした「雑事」をこともなげに処理されていたことである。子を持つてはじめて知る親の恩とはこのことである。ルーティンワークだけではなく、新たな事案に遇合したおりに、ぶれない軸がありそれに基づいて「要するに」こう言うことですよ、とあつさりと事を断するさまに、ある種畏敬の念さえも抱いていた。それはやはり小人のよくするところではなく、現在日々事ごとに右往左往する自身の不甲斐なさを改めて思い知るとともに、先生の大人の風をはるかに遠い範型として仰ぐしかないのである。

言うまでもないが、ことは「雑事」のみに関わらない。学生の指導というわたしたちの最たる枢要事においてもまったく同様である。先生がどのような指導をされているのか、その実際については指導学生たちにインタビューをしたわけではないので、関知するところではない。がしかし先生の指導を経ての日本文学会例会での発表であったり、ついには課程博士の学位請求論文としてその形を現した成果を目にすると、先生の学的方法が学生たちの骨身に沁みていることが闡明される。はたで見ていると、それは「雑事」の処理と同様、こともなげに行われているように見えてしまうのである。このことはがふさわしいかどうか、自信はないが思わず「無為自然」という語が浮かんでくるのを禁じえない。いにしえの聖天子が何もしていないかのごとく世の中を太平に治めた故事が、その指導のさまに重なって見えてくるのである。いちいち小人と対

比する要もないが、学生指導に時間を費やすその時間の長さが、質を表わすわけではないことをまざまざと思い知らされる仕儀となる。もちろん先生がどのように時間をお使いであるかは知る由もないが、無駄な時間は使わないとはたからは見えるといふことである。

日本文学領域では先生の前任の代表、芳賀紀雄先生が敷いた課程博士が前提であるとする方針を、新保先生はみごとに拡大展開されたと考える。ご専門の日本文学のみならず、現代文学にわたる指導学生をみごとな手腕で成業に導引されたのである。数値にのみ語らせる愚は重々承知したうえで、それでもなお日本文学領域において随一の博士学位取得者を輩出していることは、やはり率直に顕彰しておくべきことである。今後このよき薫陶を残された者がどう継承しうるか、試練と言わざるをえない。

先生の学問についていまさら言うには及ばないが、ひとはよくその「博覧」をもつて評する。それはそうに相違のないことではあるが、うえに言う学生たちへの感化にも顕著に現れるのは、「実事求是」の精神ではないか。語は言うまでもなく、『漢書』河間献王の好学を評するもので、唐顔師古が「務めて事実を得て、毎に真是を求むるなり」と注するように、真理を考究するに事実を基盤として思考する至極当然の学究的精神を言う。面白いのは顔師古がその解釈に続けて言う、「今流俗の書本に云う、長を長老に求めよと。ここをもつて人に従い善書を得るは、蓋し妄りに加うるのみならん」との箴言である。權威や時世粧によつてものごとを判断することの無意味さを言つて、それに対する「実事求是」の学的正当性を証しているのである。新保先生のご論を拝読するに、つねにこの精神に貫かれていることに襟を正させられる。定評やオーソリテティに基づく作品理解に囚われずに、作品に内在する「事実」を徹底して追求する。そのことによつて作品の新たな相を表出せしめる方法は、まさに「今流俗書の本」に對峙する姿勢である。

先生はあるいは後生に影響を与えるような事態は好まれないに思われる。しかしながらわたしたちは先生の残されたものと向き合わなくてはならない。その大きさにややもすれば押しつぶされそうになりかねない危機に瀕していると言つてもよい。そのようなわたしたちを見守つてほしいという身勝手な思いも先生には届かないかもしれないが、ただ先生にはいままで通りの鋭利な議論でわたしたちの惰眠を覚醒し続けていただきたい。

(平成二十八年二月)